

研究又は活動のテーマ	フェーズフリーな土木インフラに関する研究
団体名	山梨大学 地域防災・マネジメント研究センター
代表者	秦 康範
<p>(目的)</p> <p>日常時と非常時の垣根をなくすフェーズフリーの概念を土木インフラに適用し、今後求められるフェーズフリーな土木インフラのあり方を探求するとともに、具体的な施設での検討を通してフェーズフリーな土木インフラのノウハウや方法論を明らかにすることを目的とする。</p>	
<p>(概要)</p> <p>研究会(山梨大学、国土交通省甲府河川国道事務所、山梨県県土整備部、一般社団法人山梨県建設コンサルタント協会)を設置した。研究会3回(シンポジウム開催を含む)を開催し、県内の道の駅を取りあげて検討を行った。以下、具体的な成果をまとめる。</p> <p>(1) 先進地視察</p> <p>「豊島区イケ・サンパーク」、「道の駅くるくるなると」、「鳴門市津波避難所」、「松茂町マツシゲゲート」、「今治市バリクリーン」、「徳島県津波避難タワー」を視察した。その結果、フェーズフリーな観点から下記要素が抽出された。①日常時に利用率の高い魅力的な仕掛け(楽しさ)、②オープンな空間設計、③「ひと・もの・こと」の全てにフェーズフリーの要素に入れておくこと。</p> <p>(2) 寒地土木研究所との意見交換</p> <p>道の駅の目的である「休憩と地域振興」がまず十分に機能しなければ、災害時に利用してもらえない。一方で、整備した防災機能が日常機能の妨げになっているケースも確認され、日常機能と防災機能を融合させることが重要である。土木インフラをフェーズフリー化する取組は、土木インフラに景観的な魅力を併せていく作業と親和性がある。</p> <p>(3) フェーズフリーな土木インフラの実現</p> <p>「日常時と非常時を区別せず、どちらのフェーズでも活用できるもの」がフェーズフリーの考え方である。社会基盤施設が非常時にも有効に機能を発揮するための重要な視点として、以下の5つが挙げられた。①空間的な余裕があること、②長い時間軸の中で効果をもつこと、③日常の楽しさが、非日常では必要なものになること、④非常時の施設のマネジメントも行える日常時の施設マネジメントであること、⑤その存在が日常時に認知されているものであること。</p> <p>(4) 今後に向けて</p> <p>土木インフラのフェーズフリー化は、土木インフラが内在している楽しさや魅力を改めて引き出すことが重要である。既に整備された施設を後からフェーズフリーにするのは困難であり、基本設計から「フェーズフリー」の考え方が明示されることが重要である。土木インフラは息の長い構造物である。だからこそ、その供用期間の中でいつくつかの機能を持つさまざまな「余裕」を持たせることが、人口減少・公共予算削減の中では逆に効果的なものになる。</p>	